



第211回定期演奏会 マーク・マストの“悲愴”

2025年6月21日(土) 13:45開場 14:30開演

指揮/マーク・マスト

ムソルグスキー(リムスキー=コルサコフ編):交響詩「禿山の一夜」

グラズノフ:ロマンティックな間奏曲Op.69

チャイコフスキー:交響曲第6番短調Op.74「悲愴」

(ウィーン・ロマン派の最後の吐息)とも呼ばれたコルンゴルトの傑作、ヴァイオリン協奏曲と、マーラー青春のシンフォニーをご満喫いただく本日……に続きまして、次回の第211回定期演奏会(6月21日)も、人の情感を深く揺り動かす名作たちをお届けします。

セントラル愛知響の今年度定期演奏会は、年間通してのタイトルに《ロマンティック・セントラル》を掲げています。角田鋼亮音楽監督いわく「人間の感情に訴えかけるような情感豊かな作品」を毎回お届けするプログラム。有名作品はもちろんのこと、ときには、聴く機会が少ないけれど実は惚れ惚れするような(隠れた名作)を併せてお聴きいただけるのも嬉しいところ。次回定期でも、そんな出逢いの喜びを味わっていただけます!

◆バレエの一場面を見るような豪華な輝き——グラズノフの隠れた逸品!

次回定期では3曲をお聴きいただくのですが、その中でも、おそらくほとんどのかたが「こんな曲があったんだ!」と未知との出逢いを体験されるであろう作品が、グラズノフの(ロマンティックな間奏曲)という曲です。

作曲したアレクサンドル・コンスタンティン・グラズノフ(1865~1936)は、クラシック音楽にかなり詳しいかたか、はたまたバレエがお好きなかたならご存じでしょうか。今でも世界各地のバレエ団が上演している《ライモンダ》(1898年初演)は、グラズノフの音楽もまさに黄金の輝きをみせ、豪華絢爛たるステージに溢れる光と深い美しさを響かせてくれています。

彼のバレエ音楽には、他にも《四季》(1899年初演)という作品があって、こちらはバレエとしての舞台上演はほとんどありませんけれど、グラズノフの音楽はやはり色彩に満ちて生き生きと豊かに響く素晴らしいもの。たまにコンサートで演奏されることもあれば、吹奏楽に編曲されて人気を博したこともあります。

——そんなグラズノフは、帝政ロシアの末期からソ連最初期にかけて活躍した作曲家です。早熟の天才で、16歳で交響曲第1番を作曲して大成功を収め、大先輩チャイコフスキーたちの歓迎を受けています。彼の作品は早くから西欧にも紹介され、広く輝かしい創作活動を展開しながら、ペテルブルク音楽院の院長として後進の育成にも力を注ぎ(晩年、音楽的な嗜好が合わずともその才能を庇護したのが、かのショスタコーヴィチ)、名実ともにロシア音楽新世代の看板的な存在でした。

彼の作風は、ロシア国民主義と西欧の様式を力強く併せもったもので、特にオーケストラ作品には、輝かしくも深みある色彩センスに優れた筆致をみせます。上記のバレエ音楽のほか、9つの交響曲(第9番は未完)のうち、とりわけ第5番はしばしば演奏されますし、ヴァイオリン協奏曲やサクソフォン協奏曲、サクソフォン四重奏曲など、日本でも盛んに演奏される作品もありますが、次回定期でお聴きいただく(ロマンティックな間奏曲)作品69(1900年)は実演の珍しい作品。しかし、それこそバレエの一場面を見るような豪華な輝きに、素晴らしい歌心が溢れ続けて聴き手を包むこの逸品、どうしてあまり演奏されないのか……お聴きになると不思議に思われるのではないのでしょうか(たまたま知られていないだけ、としか考えられません)。ぜひ実演をお聴き逃しなく。

◆オーケストラに響く、闇の饗宴のリアル——ムソルグスキー《禿山の一夜》

さて、次回定期ではそのグラズノフの逸品を挟んで、とても人気の作品をふたつお届けします。まず最初は、モデスト・ムソルグスキー(1839~81)の交響詩《禿山の一夜》。

最近では「禿山」を見かけることも少ない気がしますが、要は荒れ果てて樹木もなくなったような山のこと。なんのことやら……というタイトルですが、この曲には物語があるのです。——聖ヨハネ祭の前夜(夏至の前夜)、キウ(当時はキエフ/現ウクライナの首都)の

街の近くにある禿山の上に、妖しい魔物の群れが集まってきます。彼らはそこで怪しげな饗宴をおこない……その様子を音楽で描いたのが、この作品というわけです。楽譜には作曲家自身がこんな標題を記しています。いわく「地底から響いてくる闇の精たちの不気味な声……闇の王の出現、彼のための讚美、暗黒のミサ、魔女たちの地獄の饗宴……狂乱が絶頂に達したとき、遠くから村の教会の鐘が響いてくる……悪魔の退散、そして暁が来る」。

そんな情景を、音楽が実に見事に活写しているの、世界中でよく演奏される人気曲になりましたが、ムソルグスキー生前には演奏されていません。というのは、この曲はもとと、さらに豪快なオーケストラ書法で書かれていた(1867年)のですが、あまりに荒々しいので演奏の機会を失っていました。作曲家は何度か書き直しているものの、その改訂ヴァージョンも埋もれたまま。ムソルグスキーが不遇のうち酒に溺れて早逝してしまったのち、彼の才能を惜しんだ作曲家リムスキー=コルサコフが、オーケストラ書法をすっきりと効果的に手直して編曲(1886年)。これがようやく世に出て、人気を博して今に至る……というわけです。

ところが、20世紀も後半になって、ムソルグスキーの荒々しい原典版のほうが出版されると、むしろその豪放磊落な筆致も、独創的な迫力があって素晴らしい……と評価されて、そちらの原典版のほうも演奏されるようになりました。録音が何種類もありますので、次回定期でお聴きいただくリムスキー=コルサコフ版の見事な編曲とも、ぜひ聴き比べてみてください。

◆ホールを満たす魂の慟哭——チャイコフスキー《悲愴》

さて、次回定期の後半でお聴きいただくのは、チャイコフスキーの交響曲第6番《悲愴》。ロシアの交響曲でも不動の人気を誇る傑作です。——ふつう「悲愴」と訳されているロシア語「パティーチェスカヤ」は「強い感情」という訳が近いそうですが、1893年10月の世界初演を聴いた聴衆は、まさかその直後の11月6日、作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)が53歳という働き盛りで亡くなるとは、想像もしなかったことでしょう(伝染病による急逝でした)。追悼演奏会で再演されたこの曲には、会場に洩れる聴衆の嗚咽が応えたといえます。

チャイコフスキー自身は、書簡でこの曲についてこう述べています。「……この交響曲には標題性はあるが、それは誰にとっても謎であるべきだ。想像できる人に想像させよう。ここにおける標題性は、全く主観的なものだ」。この音楽の奥底に秘められたものはしかし、オーケストラから(強い感情)が噴き出すように、聴き手の私たちに浴びせられ続けます。これほどに陰鬱な始まりかた・終わりかたをする交響曲も古今東西なかなかあるまいと思いますが、それ以上に、荒れ狂うように強烈な第1楽章、優美な第2楽章にもぬぐえない悪夢のように響く同音連打……、マーチのリズムに煽られながら、自制と衝迫のせめぎ合いのように高まってゆく第3楽章、そして慟哭の先にひらく深淵から、押し潰されてゆくかのような重いリズムが残るラスト……と、全曲に詰められたエネルギーの重さは凄まじいものです。

グラズノフの豪華なロマンとも異なる、はたまたムソルグスキーの想像力が炸裂する夜の夢とも異なる、人間の情感の奥底を覗き込むような傑作シンフォニー。これは、やはりコンサートホールの空間を震わせるほどに満たしてゆくオーケストラの生演奏でこそ、体験していただきたい音楽だと思います。

この3曲を振るのは、マーク・マストさん。はじめ巨匠レナード・バーンスタインの薫陶を受け、続いて孤高の鬼才セルジウ・チェリビダッケの厳しい教えを受けたマストさんは、欧米各地のオーケストラで盛んな活動を繰り広げながら、師チェリビダッケの芸術を顕彰する活動も息長く続けています。既にセントラル愛知交響楽団とも好評のうちに共演を重ねており、オーケストラとの信頼関係も深まっているマエストロ・マストとの、ロシア音楽に溢れるロマンをテーマにした次回定期演奏会、ぜひこのホールで体感いたしましょう

やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室で音楽講座を開講中。

Profile

